

シリーズ



上宮王家の悲劇

しょう ぐう

その2 仏教公認への戦い 前編

会員拡大担当 副会頭
「輝くなにわ」編集委員長 野瀬 泰良
(書画経営者)

太閤秀吉が生まれる千年前、流浪の身から豪族葛城の居候を経て、3人の天皇の祖父となるまでに昇りつめ、一代で秀吉に勝る出世をした男がいた。その名は蘇我稲目。釈尊の代より千年を経て、仏教はようやく我が国に伝来したものの半世紀に渡って布教が許されなかった。そのような中、この一人の英雄によって、布教を禁ずる皇室に密かに撒かれた一握りの信仰の種が、後の奈良・平安の護国仏教として開花する。

古墳時代の名門葛城氏

我が国建国の時代、天皇に従って統一戦争に参加しながら、大王(天皇)家の親衛隊を意味する連(むらじ)を称しない氏族もいた。そのひとつが臣(おみ)を名乗った葛城(かつらぎ)氏である。応神王朝を立ち上げた氏族の一つの葛城は、大王家の譜代であっても下僕にあらず、の意味なのだろうか。

「連(むらじ)、妃(みめ)を出さず」とは、朝廷を守護する名目で公然と兵力を保持できる連(むらじ)から、天皇家に娘を入れるのは自重するルールである。このことから皇后(おおきさき)や妃(みめ)を出せるのは、時を経るに従い葛城氏などに集中したのは仕方がなかった。前方後円墳築造の最盛期を迎える頃、大王家の外戚たる葛城氏もまた最盛期を迎えた。

ところが5世紀半ばには、継父の安康帝を寝所で暗殺した眉輪(まよわ)王の乱に連座して領地の大半を失い、一族の衰退が始まった。泣き面に蜂と言うが如く、先祖が皇妃に相応しい女子を産むことに力を注いだことが仇となったか、家が傾き始めるや女子ばかりが生まれるようになり、武列帝に皇子がなく、大騒ぎをしていた頃に前後して、葛城氏もまた行き遅れた一人娘の他に息子はなく、何度目かの家系断絶の危機に追い込まれていた。

葛城再興の夢を託された蘇我氏の誕生

この誉高い家を再興するため、歴史の絵舞台に登場したのは、それまで名も知られなかった蘇我稲目(そがのいなめ)である。祖先は南大和の一部を領有した渡来人だったらしいが、代を経るにつれて落ちぶれ、流浪の果てに葛城家の食客に成り下がった男だ。だが人心掌握の巧みさや経済の才覚が認められて後は、居候する名門の家の番頭にまで出世していた。

「この方以外には誰にも嫁ぎません」と居候に恋した愛娘に駄々をこねられ、素性もよく知らぬ男に、気弱になった葛城の長は、だいたい一人娘と家人たちに加え、嘗てこの風来坊の先祖が領したという曽我(檀原付近)の地と、臣の姓(かばね)までを引出物に与え、葛城家再興の夢を託してニュー葛城たる蘇我家を立ち上げさせた、と文献も資料もないままに大胆に言うなら、これはまるで日本の歴史を男女の思惑の絡み合いに焦点をあて、要所要所で穿った見方をしてきた橋本治氏の小説だと言われるのかもしれない。

大王家に妃を出せる名門の權益を継いだ稲目だったが、朝廷の周辺でも如才なく動き回り、遂には大連物部に並ぶ大臣(おおおみ)を称する迄に昇り詰めた。御礼にと欽明天皇に妃として愛娘を献上した。この稲目の娘、堅塩媛(きたしひめ)の

妃が、欽明帝最初の皇子をお産みになった。橘豊日(たちばなのとよひ)皇子、後の用命帝、聖徳太子の父君である。



古代葛城族の力を誇示した馬見(うまみ)古墳群の縮小模型の後ろに見えるのは、そのひとつの、石を葺き、埴輪を並べて創建時の姿を再現したナガラ山古墳。(北葛城郡河合町)

欽明帝の皇子たちを分かち蘇我と物部

ところがその数年後、皇后様が皇太子をお産みになると、蘇我の妃は暫く後宮の日陰者であらねばならなかった。この後も堅塩(きたし)媛の妃は、才媛で麗しい皇女、炊屋媛(かしきやひめ)をお産みになった。この皇女様が我が国最初的女帝、推古天皇である。

皇后が皇太子をお産みになった数年後、蘇我稲目はさらにもう一人の娘、小姉君を欽明帝の妃とした。小姉君はその後、穴穂部皇子、間人(はしひと)皇女、泊瀬部(はっせべ)皇子などの皇子皇女様方をお産みになった。間人皇女様は聖徳太子の母君であり、泊瀬部皇子は後の崇峻(すしゅん)帝である。

さて蘇我家は二代目当主、馬子の代になった。一方、まだまだお若いのに皇后様が突然薨去(こうきょ)なされ、それからは堅塩(きたし)媛様が皇太子を養育され、後宮を完全に掌握なさった。これで馬子にも蘇我家にも順風が吹き出した。だが同じ蘇我の縁者でも、小姉君がお産みになった穴穂部と泊瀬部の皇子は、馬子にも見放され、日陰者のままであった。二人の心は蘇我から離れ、中でも穴穂部皇子はことあるうに物部を頼るようになられた。このようにサポーターを異にする欽明帝の皇子たちは、後にサポーターを巻き込んで骨肉の皇位争いに明け暮れ

るのだが、それは先のこと。

さて中国に隋帝国が興る10年前の571年、欽明帝が崩御(ほうぎょ)されると、翌年皇太子が長年連れ添われた皇女様を皇后とされ、第30代敏達(びたつ)天皇として即位された。皇后とは仲むつまじい新帝であったが、継母の堅塩(きたし)媛様に氣遣って、炊屋(かしきや)媛様を妃になされねばならなかった。しかも皇后が即位後一年も経ずして薨去(こうきょ)なされたので、後に妃の炊屋媛様が史上希有のことだが改めて敏達天皇の皇后とられた。帝と新皇后は政局安定の為に蘇我とも物部とも距離をおかれ、出雲王家末裔の三輪君を頼られた。

一方、敏達帝が即位なされた頃、歳が離れた兄妹でありながら従兄妹でもある、橘豊日皇子と間人(はしひと)皇女がご結婚され、敏達帝3年、お二人の間に御長男、厩戸(うまやど)皇子がお生まれになった。後の聖徳太子である。

仏教を弾圧された敏達天皇

蘇我稲目の抜きん出た人心掌握力や人望は、実は仏へ信仰から来る彼の徳によるものだった。釈迦滅後千年にして、ようやく朝鮮半島から仏教が伝わったものの、我が国は八百よろずの神がいまいる国であり、異国の神、仏に帰依するのは固く禁じられていた。欽明天皇は、布教はしないという条件で、仏への私的な信仰のみを蘇我稲目に許された。稲目は黙ってそれに従ったが、布教の志は棄てなかった。彼の遠大なる企ては、仏を信ずる娘たちを皇室に送り込み、国の頂点をさわる皇室の中に、蘇我の血が流れる皇族と仏の篤き信仰者を、ともに産めよ増やせよと鼠算式に増やすことだった。

だが二代目の馬子は、ご禁制を無視して領地内に寺を建て、僧を集めて積極的に布教活動を開始した。仏にすれば貧者も病人も、罪人までもが救われる、死んでも来世で魂が蘇生する、今生で善行を積むだけ来生では善運に恵まれる、との仏の教えに大衆は喝采して歓喜した。それを皇祖皇宗の御神霊への侮辱だとお怒りになった敏達天皇は、585年、物部守屋らに命じて、寺を破却させ、僧衣を剥ぎ取って僧や尼僧を辱め、仏像は蕃神の像なりと浪速の堀江に棄てさせられた。結果崇(たかし)りはないかと伺う物部だったが、何事も起こらぬと知れば、崇(たかし)派の蘇我を世間中の物笑いにした。

崇(たかし)派の用命天皇が即位される

だがその同じ年、敏達天皇が突然流行病にお倒れになったかと思うと、そのまま崩御(ほうぎょ)なされた。往時の日本人が、仏という異国の神の、神通力の凄さにいかに驚愕、恐怖したかは想像に難くない。翌586年、六十歳に手が届こうとされる橘豊日皇子が、お若い間人皇女を皇后にされ、第31代用命天皇として即位された。初めての蘇我系崇(たかし)派の天皇である。だが物部氏に推される穴穂部皇子にはこの即位が承服できない。しかも新帝は常に病床にあって、為に大臣馬子が補佐を務めようとの気配も見える。壮健で意気盛んな皇子の悔しさと腹立たしさは益々納まらない。往時の政局は、三輪君逆(さかう)物部大連守屋、蘇我大臣馬子の三巨頭が鼎立(ていりつ)して、天皇家を支える形で、危うげながら平和を保っていた。崇(たかし)か廃(たかし)か、仏教公認の是非に皇位の争いまでを絡めて、蘇我、物部、三輪、三者の勢力バランスを揺さぶりながら、どうやら時代はこれら三者の対立を超えた一人の中心者の登場を待っているようであった。その方はまだそのような自らの天命を知る事も無く、ただひたすら後宮にて仏に祈りながら父の帝の看病をなさっていた。厩戸皇子、この時御歳13歳であった。(次号に続く)



大陸の文化や技術を携え渡来したハジ、ソガ、シバなどの人々は、先ずは南河内の石川流域にまとまって住んだという。右手の山々は彼らと親交があった葛城氏の領地であり、前方の大和川より北方は、異国文化の流入をよしとしない物部氏が領有した中河内である。

(次回予告) 仏教公認への戦い 後編



NO IMAGE